

幼児と保育者の相互受容関係について

加藤 望

On a building the mutual acceptance relationship between an infant and a child-care worker

KATOU nozomi

近年、日本においては育児支援の一環として乳幼児の一時預かり事業が行われている。一時的に子どもの保育を他者に託すことにより、保護者の育児疲れを解消する目的での一時保育等も行われている。一時預かり事業を担う保育側からみると、その保育内容は流動的な環境により不安定になりやすく、その中でまずは子どもの情緒安定を図ることが初期の重要な課題となっている。

本研究では、一時預かり事業を利用した子どもと保育者との間に、いかにして信頼関係が芽生え、子どもの情緒が安定して遊びが展開に向かうかを、保育観察を考察することにより明らかにしている。

Keywords : 一時預かり事業, 子ども, 保育者, 受容, 遊びの展開

temporary nursery care, child, child-care worker, mutual acceptance relation, Deployment of play

I. 問題と目的

近年、文部科学省や厚生労働省における育児支援の一環として、幼稚園・保育所では「預かり保育」「一時保育」「リフレッシュ保育（名古屋市他）」等という名称を使用し、短期間もしくは短時間の一時的な保育を実施している。「預かり保育」とは一般に、幼稚園教育課程終了時間後に希望者を対象として行う保育を指す。その保育対象者は、在園児及び非在園児（卒園児・未就園児等含む）のうち、保護者が幼稚園教育終了時間後に保育を希望する幼児である。（丹羽，安藤・2005）また「一時保育」「リフレッシュ保育（名古屋市他）」等は、保護者の需要に応じて、保育所で行われる一時的な保育を指す。これまでは保護者の事故や病気等、一時的に保育を必要とする家庭や地域の要求に応じて行われてきた一時保育だが、1996年度には、保護者の育児疲れの解消も利用目的に加えられている。（全国保育団体連絡会・2014）

どの一時預かり事業も、日々、保護者の需要に応じて行われる保育であり、保護者の希望理由も様々であれば、保育時間や保育日数が常に定まっているわけでもない。よって保育時間と保育環境を構成する園児の顔ぶれや雰囲気また活動は、日々、流動的となる。そのため保育者は常に安定した保育時間と保育環境、そして保育内容を子どもたちに提供することが通常の保育より困難となる。一時預かり事業とは、子どもたちにとって非日常的な保育の場なのである。

子どもが安定した情緒で保育時間を過ごすということは、どのような保育の状況であっても、「それぞれの子どもが、自分のしよと思うことをもち、それをするのできる保育」（津守・1980）を実現するために、基盤となるものである。子どもたちがいかに安定した情緒で保育時間を過ごせるかという課題は、一時預かり事業という流動的な非日常の保育環境においても例外ではなく、最重要な初期課題であると考えられる。

一時的な保育において、子どもたちが安定した情緒で過ごせる保育を実現していくための保育者の姿勢や保育環境とはどのようにあるべきか。子どもの心理学的な居場所を構築するために、ありのままの子どもの

姿を認め（本来感）、受け入れること（受容感）の必要性については多くの教育学者、心理学者の唱えるところである（則定・2007 他）。これらの居場所づくりにおける研究の多くは、青年期を対象とした研究であり、乳幼児期の居場所づくりについては未だ研究情報が希薄である。では実際に、保育者は幼児の居場所を作るために、どのような保育を行っているのか、その過程はどのようなものか、一時預かり事業利用幼児と保育者との初期の関係性を観察し、考察する上で明らかにしていきたい。

II. 方法

本研究を行うにあたり、一時預かり事業を利用する幼児と、その幼児を保育する保育者との受容関係を知るために保育観察を行った。また、その保育観察をふまえて保育者の意図や目的などを理解するためにインタビュー調査を行った。研究方法の詳細については以下の通りである。

1. 保育観察

1) 調査場所 調査対象 及び 調査期間

調査場所：通常保育を主体とし、一時預かり事業も行っている認可外保育所（所在地：愛知県）

調査対象：調査対象は主として、一時預かり事業を利用した KO（2 歳 7 カ月）とその保育を主担当することになった保育者 A である。KO を調査対象とした理由については、観察期間中に一時預かり事業を利用したという無作為であることが最大の理由である。KO は自分の感情を惜しみなく表出する幼児であり、対象としては感情の変化を観察することが容易な人物であると解釈した。保育者 A の詳細については、インタビュー調査の結果を参照とする。

調査期間：2014 年 8 月から 2014 年 9 月のうち KO が一時預かり事業を利用した 3 日間

2) 調査の方法

認可外の保育所において、一時預かり事業を利用した KO の登園する午前 11 時から 13 時頃まで、保育室の中に入り観察を行った。その際、保育観察が保育者や対象児、保護者の負担にならないよう最大限の配慮を行い、観察者は KO や他児と積極的に関わることなく保育観察に徹し、主として筆記にて記録を行った。観察の補助として映像撮影と写真撮影も行ったが、個人情報保護の為に安全な場所に保管するとともに、本論文には掲載しない。また、対象児については生年月日と性別のみを情報として得ることとした。

保育観察時の主な着目点や着目理由について説明する。まず、保育観察を行うにあたり、時間の進行を知る為に観察記録に時間を記載した。対象児の姿については主として対象児の行動と言動を記録し、保育後に観察者（筆者）の考察を括弧書き〔 〕にて加筆した。また、保育者の援助として、保育者の行動と言動を記録し、保育者の意図については、インタビュー調査から保育者 A が対象児 KO にどのような意図を持って働きかけていたかを記載した。また、実際に観察されることは少なかったが、対象児と他児との関わりも観察記録の対象とした。観察後の主な考察点として、観察者である筆者の保育経験と、間主観性（鯨岡・2006）の概念（「私の主観に「あなた」の主観のある状態（気持ち、気分、意図、感情、等々、何らかの主観的状态）が分かる状態）を取り入れて考察を行った。

保育者と対象児の相互関係から読み取ることでできた受容状態を、「受容」()・「どちらでもない」()・「拒否」() の三段階の矢印で表した。ここで言う「受容」の状態とは相手の意思を尊重し、相手の願いや指示の通りに行動することと位置付ける。「拒否」とは、理由によらず、相手の意思に沿っておらず、背く言動や行動をとること、また「どちらでもない」状態とは、「受容」と「拒否」のどちらの要素も存在する、もしくはどちらの要素も存在しないような判別し難い場合を指す。矢印の方向は、「受容」や「拒否」されている言動や行動が出現した方を起点としている。

2. インタビュー調査

1) 調査対象 及び 調査日

調査対象: 保育者A (認可外保育所勤務, 保育士資格所持, 保育歴7年目, KOの主な保育を担当)

調査日: 2014年9月24日 13:30~14:20

2) 調査の方法

KOの保育における援助の意図を主体に, インタビュー調査を行った。インタビューは保育所内で, インタビュアー(筆者)と保育者Aの二名が着席した状態で行った。保育者Aから録音許可を得, 後日, 筆者が書き起こして記録とし, 記録内容が事実と相違ないかを保育者Aにも確認をしていただいた。

3) 調査の結果

インタビュー調査において得られた情報の中から, 保育者Aについて記載する。

保育者Aの保育経験総年数は8年目である。保育者Aは短大を卒業後, 幼稚園に4年間勤務し, 結婚を機に退職した。その後, 自身の子育てがひと段落し, 3年間, 保育所に勤務することとなる。現在勤務している認可外保育所には, 前職の保育所が閉所されることを機に, 勤務することとなった。保育内容に関しては, 絵本を読み聞かせることが好きであり, 得意としている。現在, 勤務している保育所では三歳未満の乳幼児が在園児の多数を占めることや, 勤務時間帯が主として午後であるということもあり, 教育的な活動を行うことよりも, 養護にあたる, 子どもをケアすることに重きをおいている。一時預かり事業を利用する幼児の保育に関しては, 幼児に怪我や事故のないように保育することを重視しており, 幼児が楽しく笑顔で家庭へ帰れるようにと心掛けて保育を行っている。また, 幼児が楽しい保育時間を過ごすことができるよう一緒に好きな遊びを探すことに心を配っている。家庭的な保育が自身の理想的な保育だと語る。

KOが一時預かり事業を利用するにあたり保育所と経営側は相談をし, 通常勤務している保育者に追加してKO担当として1名の保育者を配属することにした。その際, KO担当として勤務することが可能であったのが保育者Aであった為, 保育者AがKOの担当となった。保育者AからみたKOは, しっかりしている子という印象であったようだ。KOの排泄が自立していることや, 大人との会話が成立することなどを例に挙げ, 周囲の人から愛されており, 適切な養育や躾がされていると感じていた。この一時保育の中では, 怪我なく笑顔で楽しく過ごして欲しいと願ってKOの保育を行っていた。

インタビュー調査ではこの後, 保育観察記録を辿りながら, KOとの関わりの意図を聞いている。その内容については, 結果の保育記録に記載し, 考察の参考としている。

III. 結果と考察

保育の過程を四つの段階「保育の起点」「模索の段階」「活動の展開点」「本格的な活動の展開」と分類する考え方がある(津守・1979)。保育は幼児と保育者が顔を見合わせた時から出発し一日の活動を模索する段階を経て活動が広がっていくという考え方である。「保育の起点」においては保育者が幼児と関係性を結ぶことが大切であり, この「起点」の段階で幼児は保育者に対して身体の接触やまなざしなどあらゆる角度から安心感を得, そして保育時間を共に過ごす楽しさも求めているという。そして安心感を得た幼児は「模索の段階」に移行し一日の活動を模索する。この「模索の段階」は保育の発展が見られる前段階であり, 幼児は保育者に接触を求めてくることが多く依存的になることが指摘されている。よってこの段階でいかに保育者が幼児の依存心にこたえられるかが, 幼児が安心感をもって過ごすためには必要であるという。

一時預かり事業も保育の一環である。しかしながら先に問題として提示した通り, その保育環境が流動的であるがゆえに, 通常の保育よりも幼児の活動が展開を見せることは困難であると考えられる。そこで本研

究では実際の一時預かり保育事業の保育における「起点」「模索」の段階をひとつずつ追いながら、幼児が保育者から安心感を得て保育時間を活動的に過ごせるようになっていく為に必要な幼児と保育者の関係性に重点をおいて考察を行う。

以下、KOと保育者Aにとっては2回目の保育にあたる平成26年8月7日（木）の保育観察記録を考察する。この日、KOは一時預かり保育事業を利用するために母親と共に11:00に登園した。保育室に入室した時から既に泣いており、他者の言葉は何も耳に入らないという状態であった。母親は保育者たちに挨拶をして部屋を出て行き、KOはその後を追い必死になって扉にすがりつくという場面からこの日の保育が始まった。以下、保育観察の記録と保育後に行ったインタビュー調査から保育者Aの意図を含めた表を保育記録として添付しながら時系列に沿って考察を行う。

1. 起点 保育者Aからの受容

保育者と子どもの関係を考える際、保育者は全面的に子どもを受け入れる態勢であることが理想だと思われるだろう。保育者Aもおおらかな人柄で、子どもに対しての受動的な姿勢は、園長からも高く評価されている。本研究による保育観察中も、常時ゆったりとした口調でKOに話しかけ、感情が大きく起伏するような場面は観察されなかった。しかし、保育所での生活はKOの意思に沿えることばかりではない。

表1. 保育記録1

時間	対象児の姿	相互受容状態	保育者の援助	保育者Aの意図
11:10	<p>KOはパンツとズボンを後ろ手に持ったまま立ちすくみ、「ママー！ママー！」と泣いている。目から涙は出ていない。</p> <p>保育者三人にパンツとズボンを履かせてもらうが、「ギャー！」という大声と全力を使って拒否しようとする。</p> <p>立ちすくんだまま、泣いている。「ねむーいー、ねむーいー。」と繰り返し言いながら泣いている。</p> <p>保育者Aの質問には答えない。</p> <p>（目を閉じること—意思を停止させること（津守・1980）KOは本当に眠たいのではなく、目を閉じて休むことで、現実を拒否しようとしていたのではないだろうか。</p> <p>保育者Aの言葉に「うん。」と返事し、少し泣き止みかける。</p>	<p>KOを拒否</p> <p>保育者を拒否</p> <p>KOの言葉を受けていない</p> <p>Aを拒否</p> <p>KOを受容</p> <p>Aを受容</p> <p>KOを受容</p>	<p>「パンツだけ履かせて？いいかな？」とKOに聞き、保育者三人でKOにパンツとズボンを履かせる。</p> <p>KOが眠いと言っていることに気づき、「なに？眠いの？お布団持ってこようか。」とKOに言葉を掛ける。</p> <p>KOのバスタオルを取りに行く。</p>	<p>観察者もいたため、いつまでも下着をつけないという状況は好ましくないと考えた。他の保育者の協力もあり、下着とズボンを履かせることができた。</p> <p>まだ暑い日だったので、水遊びできたらなあと思ひ、言葉を掛けた。</p> <p>自分のバスタオルを敷くことで、空間的なKOの居場所を作ろうと思った。</p>

KOがトイレに行きたいような仕草をした為、保育者AがKOのパンツとズボンを脱がせ、KOもそれに応じた<受容状態>。排尿という生理的な欲求には逆らえず保育者Aの行動を受け入れたが、トイレから出てもパンツを履かずに、立ちつくして泣いていた。みかねた保育者がKOにパンツを履かせようとするが、KOは誰にもふれられたくない！構われたくない！といった様子でパンツを後ろ手に隠し、誰にもとられないようにしていた<拒否状態>。しかし、いつまでも下着をつけない状態は好ましくないと保育者たちが判断し、保育者が三人がかりで、KOにパンツとズボンを履かせた。この行為は、KOの望んでいる「構われたくない！」という意思行動とは相反する行為であり、KOは全力でこれを拒否している<相互拒否状態>。

その後、「眠い」と泣きじゃくりながら訴えるKOに対して保育者Aは水遊びを誘いかける。暑い日だったということもあり、水遊びをしようという意図を持ってKOを誘いかけた。しかし、この言葉はKOの「眠い」という意思に応える言葉ではない。故に、KOはこの保育者Aの言葉には返答しない。従ってこの状況もお互いにお互いを受け入れることができていない<相互拒否状態>。

次に保育者Aが、KOの「眠い」という言葉を受けて「何？眠いの？お布団持ってこようか？」と尋ねると、KOは「うん。」と返事をして泣き止みかける。この「眠い」というKOの発言は睡眠欲からくるものではなく、「目を閉じることで自らの意思を停止」(津守, 1980)し、KO自身が気持ちを落ち着かせようとしていたからではないだろうか。そして、布団を持ってくるという保育者Aの言動から、KOは自分の気持ちが保育者Aに伝わったと感じ、泣き止みかける<受容状態・本来感>。つまり保育者AがKOの意思に沿うことで、KOも保育者Aに肯定的な返事をし、相互が応答し合う関係が成立している<相互受容状態>。

2. お互いを受容できない状態

たとえ保育者が幼児の気持ちを汲もうとしても、その想いを叶える保育が行えるかどうかは、両者のおかれている状況にも左右される。

表2. 保育記録2

時間	対象児の姿	相互受容状態	保育者の援助	保育者Aの意図
11:15 他児は別室で昼食中	母親が恋しくて泣く。 「おかー！ママ！おかー！ママ！」と立ったまま繰り返し泣きながら言う。 保育者Aから昼食を誘われるが拒む。 Aが昼食を食べ始めるのを見て、一瞬泣き止む。 (保育者Aが昼食をとる姿に注目して、泣くことを忘れていたような様子。 「行く～！行く～行く～！」と言いながら再び泣きはじめる。 ママは見に行かないし、昼食も食べないで寝ると主張する。 (保育者Aの様子等から、母親のところへは行けないのだと察知した。	KOの言葉を受けていない Aを拒否 KOを受容しているようだが、実は違う Aを拒否	昼食の準備をする。 保育者Aは昼食(弁当)を二つ持ってきて、「これKOのね、こっち先生の。」とテーブルに並べる。 「(昼食を)食べてみる？いやないの？じゃあ先生はいいただきます。」と手を合わせて挨拶をし、昼食を食べ始める。 KOの「行く」という言葉を受けて、「ママ見に行ってみる？見に行く？」とKOに尋ねる。	まだ探り探りのKOと関わっている状態であった。 まだ寝ないで、昼食をとって欲しいと思い、自らが昼食をとる姿を見せて、KOも食べたくなるかなと思った。 実際には母親を見に行くことは不可能であった。ただ、外にでると気分も変わるし、ここに閉じ込められているわけではなくて、自由に外へも行けるのだということを伝えたいと思った。

他児は昼食の時間となり、「KOにも寝ないで昼食をとってほしい」という意図を持っていた保育者Aは、KOの傍にいて、昼食の支度をし始める。これはKOの寝たいという気持ちには沿っていない<拒否状態>。ゆえに、保育者Aの昼食への誘いかけに拒否を示すKO<拒否状態>。続いて、KOは母親のところへ行きたいのだと訴える。保育者AはKOの気持ちと言葉を受けて、「ママ見に行ってみる？」とKOに尋ねる。しかし、それまでは母親のところへ行きたいと泣いていたKOが、ここで急に首を横に振り、ママのところへ行かないと言い始める<拒否状態>。母親はすぐ近くで私用中であつたため、母親の元に行くということは環境的に不可能ではなかった。しかし母親の元へ行くということは、保育の必要性があり、母親から保育を依頼されているという保育者Aの立場を鑑みると、母親に迷惑をかけることにもなりかねず、現実的には不可能なことである。ここで保育者AがKOの言葉を受けて「ママ見に行ってみる？」と聞いたことは、言動をそのまま受け取るならば、KOを受容しているように思える。しかし、実際には、母親を見に行くことは不可能であり、KOの母親のところに行きたいという気持ちは行動としては実現することができない状況である<拒否状態>。そのことをKOは保育者Aの些細な表情の変化や言動などから感じ取ったか、もしくは予め母親から会えないことを告げられて理解していたのだろう。それまでの母親に会いたいと言っていた気持ちを急にひっくり返し、母親のところへは行かないと主張し始めるのである。このとき、保育者AとKOの間は、相互に拒否し合っている状況である<相互拒否状態>。

3. KOからの受容

KOから拒否的・否定的な言動や行動をされながらも、保育者AはKOに対して根気強く関わり続ける。そのことにより、KOの方からも保育者Aを認知し手、受け入れるような行動や言動を行うようになる。

表 3. 保育記録 3

時間	対象児の姿	相互受容状態	保育者の援助	保育者Aの意図
11:30	保育者Aに注視する。 泣き止み、保育者Aの行動をじーっと見ている。 (保育者Aの行動が気になり、泣くことを忘れている。 保育者Aに鼻水を拭かれることに拒否を示し、ティッシュを受け取って、自分で鼻水を拭く。 二回目は保育者Aに鼻水を拭いてもらう。 「(外へは) 行かない。」と言い、首を横に振る。「ねむいーねむいー。」と訴える。 部屋にKOとついたでの向こうにいる観察者だけになる。 KOの泣き声がトーンダウンする。	<p>どちらでもない</p> <p>Aを拒否</p> <p>Aを受容</p> <p>Aを拒否</p> <p>KOを受容</p>	KOの荷物の中身を見る。 KOの鼻水を拭こうとする。 KOの鼻から鼻水が出ているので、鼻水を拭こうとティッシュを取り出し、KOの顔に近づけるが拒まれる。 再びKOの鼻水が出ていることに気づき、ティッシュを取り、KOの鼻水を拭く。 保育者Aは「行く？お外行く？」とKOに聞く。 敷布団を準備する。 保育者Aは別室へ、敷布団を取りに行く。	この時、保育者AはKOが自分の姿を視線で追っていることに気付いていなかった。 保育者AはKOとの二回目のこの一時保育の間に、自分の顔を覚えてくれればよいと思っていた。 そしてこの時はまだKOが自分にはなついていないと感じていた。 外へ出ることで、気分転換をはかろうとした。 ずっと立ちすくんでいるKOが座れる場所を作ろうと思った。

泣いているうちに鼻水が出始めたK O。保育者Aはティッシュを取り出し、K Oの鼻水を拭こうとする。しかしK Oは保育者Aに触られたくないという様子でこれを拒否し、保育者Aからティッシュを受け取り、自分で自分の鼻水を拭く<拒否状態>。しばらくすると保育者Aは再びK Oの鼻水が出ていることに気が付き、ティッシュを取り出して拭こうとする。そしてその時K Oは、保育者Aに鼻水を拭いてもらうことに抵抗を示さなかった<受容状態>。

常に保育者側ばかりが先に相手を受容している、受容しようとしているという順ではなく、このように幼児の側から保育者を受容するという場面も観察された。総合的にみるとこの時のK Oは保育者Aに対して否定的な感情を露わにしているにみえ、全面拒否状態であるように思われるだろう。保育者AもこれらのK Oの姿から、K Oは自分になついていないと感じていた。一見してこのK Oの受容状態はわかりにくい、K Oはここで自ら保育者Aの行動を受け入れており、ここから受容と拒否を繰り返しながら保育者Aを徐々に受け入れていくのである。

4. 模索の段階 ～拒否が受容へ向かう場面～

表4. 保育記録4

時間	対象児の姿	相互受容状態	保育者の援助	保育者Aの意図
11:45 他児は昼食を食べ終える	絵本を見る。 立ったままではあるが、泣き止み、保育者Aの読む絵本をじーっと見ている。 保育者Aの質問には答えない。 時折、思い出したかのように「ママー」と泣き声で言う。 絵本が終わると、絵本を読む以前より大きな声で「ママー」と言い、泣く。 保育者Aに言われるままボタンを押す。ポンッという音がする。この絵本が気になったようで、しゃがみこみ、音絵本を触る。 再び「ママー」と本格的に泣きだし、ぼろぼろ涙をこぼす。 保育者Aに鼻水を拭いてもらう。 ごみ箱まで行き、ティッシュのごみを捨てる。	<p>どちらもでもない</p> <p>Aを拒否</p> <p>KOを受容</p> <p>Aを受容</p> <p>Aを受容</p> <p>Aを受容</p>	<p>絵本を読む。 絵本を取り出し、K Oに語りかけながら読む。 「電車が来まーす。どこ？電車がきた？発車しまーす。タタタタ…」 「あ！見て見て？」と言いながら少しずつK Oに近づく。 「悲しいねえ。悲しい悲しい。」とK Oの気持ちを代弁する。 別の絵本（音のなる絵本）を取り出し、「ここのボタンを押してね。」と誘いかける。 K Oの涙や鼻水をティッシュで拭く。 ○K Oに頼み事をする。 「ごみ箱覚えた？ほいしてきて？」とK Oにティッシュを渡す。</p>	<p>K Oの夢中になれるものを探していた。</p> <p>保育者AはK Oが家でもお手伝いをしているのか、人に物事を頼まれることで気持ちが落ち着く様子だということを前回の保育から感じ取っていたようだ。</p>

保育者AはK Oが興味を持てる物事を探し続ける。電車の絵本を取り出して、語り掛けながら読みはじめ

るが、KOは保育者Aの語り掛けには一切答えない<拒否状態>。大きな声で母親を求めて泣くKOに対し、保育者Aは「悲しいねえ。悲しい悲しい。」とKOの気持ちを予測し、代弁する<受容状態>。そしてKOの興味があることを探り、別の絵本を出し「ここのボタン押してね。」と誘いかける。KOはこれまでの無反応とは異なり、保育者Aの誘いかけにのってボタンを押す(受容状態)。しかし再び母親が恋しくなり、大きな声で泣き始める。保育者AはティッシュでKOの涙や鼻水を拭き、このときKOは保育者Aに完全に身を委ねている<受容状態>。

この後、使い終わったティッシュを保育者Aは、KOに「ばいしてきて？」とゴミ箱に捨ててくるように依頼している。このKOに物事を依頼するという行為が、この空間で過ごす今のKOにとっては、自分の「役割」を得た状況となっている。この「役割」を得たことをきっかけに、KOは落ち着きを見せ始める。このように「役割」を得て、落ち着く事については、青年期の居場所感尺度の先行研究により、前述の「本来感」「受容感」に次いで「役割感」という三つの因子が「居場所がある」と感じる為の居場所感尺度に関係していると言われている(石本・2009 他) ことに由来していると考えられる。青年期における居場所感尺度は、幼児期にも当てはまるようである。KOの場合も役割を得て、自分の居場所を感じたのだろう。また、保育者Aはこの時、KOが手伝いを頼まれると気持ちが落ち着くということ、前回のKOとの保育から経験として感じ取っていて、意図的にKOに依頼した状況であった。

5. 保育者の一方的受容の継続 ～会話の成立から安定した相互受容状態へ向かう～

表 5. 保育記録 5

時間	対象児の姿	相互受容状態	保育者の援助	保育者Aの意図
11:50	音絵本に見入っている。 太鼓のついている音絵本に興味を持つ。 保育者Aの質問には答えず、また泣きはじめる。 保育者の質問には答えないが泣き声が小さくなる。「ママ…ママ…」 保育者Aの言葉に答えるが、「パンを三つ食べた。」と言う。 パンを三つ食べたから、ごはんはいらないというような口調ぶり。 「うん。」 「飲んだ。」と答える。	<p>Aを拒否</p> <p>KOを受容</p> <p>Aを拒否</p> <p>会話の成立</p> <p>KOを受容</p>	<p>音絵本を取り出し、音を鳴らしてKOに見せる。 KOに「やってみる？」と聞く。 「やってみるのはだめなんだな。」と一人言を言い、「おせんべ食べる？」と違う質問をする。 「ごはん食べる？」と聞く。 KOの言葉に答える。 「三つも食べたの？三つも食べたらお腹いっぱいだね！」 「お茶も飲んだの？」とKOに問いかける。</p>	<p>KOの好きな遊びは何かを探している。 KOがお腹を空かせているのではないかと、また、気持ちを和らげようと手探りしている状態。実際に棚からお煎餅を取り出す。 昼食を摂ってほしいという意図から。 まだ暑い日であった為、KOの水分補給を気にかけた。</p>

保育者AはKOの反応がなくても<拒否状態>、語り掛け続ける<受容状態>。KOは何が好きか、何に

興味があるかを探りながら、話の内容を変えつつ語り掛けている。この時、受容関係は保育者Aからの一方的受容状態となっている。この場面に至るまでの保育で、KOは食事を摂ることにに関して否定的な言動や行動を繰り返し示している<拒否状態>。倉本(2012)が子どもの不安症状の身体的表出に関して、喉がつかまる感覚、のみくだし困難や胃部不快感、不眠などと列挙しているように、安心感を得られない状況下において口に物を入れる(食事すること)や目を閉じる(眠る)ことは難しい事だと推察され、この時のKOも然りである<拒否状態>。もちろん保育者AもKOが食事を拒否していることは承知であったが、KOが本当はお腹を空かせているのではないかと、水分が足りていないのではないかと心配し、食事や水分を摂って欲しいという意図があり、何度もKOに食事や水分補給を勧めている。

度重なるKOの拒否状態に対しても、保育者Aは依然として態度を変えることはなく、KOに語り続ける。この事がKOを受容の状態へ導きはじめ、KOが保育者Aに向き合い<受容状態>、会話が成立するまでに至っている。幼児がいかに拒否状態であっても、保育者が態度を変えることなく受容し続けることによって、拒否状態であった幼児も受容の状態に導かれていくのだということは、津守(1979)の言う「子どもにゆずる」形を具現化していると考察される。この後、KOは昼食こそほとんど摂らなかつたものの、保育者Aと一緒に手遊びを楽しんだり、音絵本で遊んだりして保育時間を過ごした。

IV. 結論

保育職は感情労働(神谷他・2011)とも言われるが、いくら感情を意図的に操ろう、偽ろうとしても、相手である乳幼児は大人よりも遙かに相手の本心を直観的に感じ取ってしまうのではないだろうか。ゆえに口先だけで相手の意に沿っているかのような事を言ったとしても、子どもの側はそれを自分が受容された事とはみなさないのである。子どもを受け入れる際に、ごまかしたり嘘をついたりすることは、内容がどんなに相手の意思に沿っているようみえても有効性はない。かえって信頼感を損ねることになっていく可能性がある。また、保育における初期の段階で、保育者Aが意図を持って働きかける内容(例えば、下着を履くことやお茶を飲むこと、食事を摂る事等)について、KOはその全てを拒否している。子どもと保育者が出会い、その関係性が相互受容状態となる前段階においては、保育者が何らかの意図を持って子どもに働きかける事は、子どもの情緒を安定させるという目的の為に有効でないことがわかった。

ただし、保育者が子どもの気持ちを言葉に表すという事象については、例え保育者が子どもと全く同一の感情を共有していないとしても、相手を理解し受け入れようとするという点においては有効であることが観察された。保育者Aの場合、母親が恋しくて泣くKOに「悲しいねえ、悲しい悲しい。」と言葉を掛けた際、保育者A自身が実際に悲しい思いをしていたわけではない。KOが泣いているその姿から、KOの今の気持ちを推察して発せられた言葉である。KOの気持ちを推察して言葉に表すことで、KOは保育者Aに対して「今の自分の感情を理解してくれる人」(青年期の居場所感尺度による「本来感」)と感じ、気持ちが少し落ち着いた様子が見受けられた。従って、保育技術として「子どもの気持ちを代弁する」という方法については、相互受容関係を導いていくためには有効であるといえるだろう。

また、保育者の側に立ってみれば、大人との対人関係を考慮すると、相手からこれほどまでに全面的な拒否を受ける人間関係という状況は稀である。全面的に拒否状態である相手と関係を結ぼうとする人間関係は、相当なストレスのかかる状況にある。そのようなストレスフルな状況において、いかに子どもが言葉に表していない心の声を正確に理解して応じるかということが、保育者の技術であり、つまりは受容の質に関係している。ただここには、個々の保育士が持ち合わせている保育技術を最大限に発揮できるような所長と経営者の計らいが存在している。この保育所ではこの日、一時保育を利用したKOただ一人に対して、一名の保育者がつきっきりで担当することが可能な環境であったのだ。保育者Aは他児やKOの保育以外の業務に縛

られることなく、ゆったりとKOと向き合ってKOとの保育時間を過ごすことが可能であった。これがKOとのストレスフルな人間関係の状況下においても、比較的早い段階で相互受容関係を結ぶことができた事に貢献しているのではないかと考えられる。

ここで更に触れておきたいのは、いつも保育者側ばかりが先手をうって子どもを受け入れようとしているばかりとは言えず、子どもから積極的に保育者を受け入れようとしている場面も観察されたことである。それが今回のKOにおいては、保育者Aにティッシュで鼻水を拭いてもらうという行為であった。それまでのKOは保育者に対して全面拒否状態にあるようにみえるが、一度、保育者Aに鼻水を拭いてもらうという行為を受け入れることで、KOはKOなりに保育者Aやこの一時預かり事業で過ごす自分の状況を少しずつ受け入れようとしている様子が伺えた。鼻水を拭く、拭いてもらうというほんのささやかな行為、そのひとつひとつが積み重なり保育者と乳幼児の信頼関係は構築されていくのである。

V. まとめ

本研究により、保育者は子どもの気持ちを理解しそれを子どもに理解していると証明すること（KOとの場合は代弁という形）や、子どもの度重なる拒否状態に対しても感情的に態度を変えることなく冷静に応じることで、一時預かり事業のような短時間・短期間の保育においても相互受容関係が培われていくことが明らかになった。また、ごまかしや偽りを使用して子どもを受け入れようとするのではなく、真摯に向き合う必要がある。そして相手を受容するという事象は、一方行の出来事ではなく相互の関係性の上で成り立っているものであることが明らかとなった。

今回はKOと保育者Aとの一場面を観察対象としたが、この研究の観察事例や観察対象を広げ研究を重ねていくことで、この研究がより総体的で客観的なものになっていくと考えられる。質的研究と量的研究を融合させ、効果的に使用し、主観を客観に近づけていくことが今後の課題である。

謝辞

本研究を行うにあたり、保育観察やインタビュー調査等に快くご協力いただきました保育所の所長、保育者A様はじめ職員の皆様に厚く御礼申し上げます。また、本論文を作成するにあたりご指導ご協力をいただいた先生方、そしてこのような研究や論文作成を行える環境を与えてくださった全ての皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 石本雄真「居場所概念の普及およびその研究と課題」(2009)『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』3-1, 93-100
- 石本雄真「青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響」(2010)『発達心理学研究』21-3, 278-286
- 神谷哲司, 戸田有一, 中坪史典, 諏訪きぬ「保育者における感情労働と職業的キャリア—年齢、雇用形態、就労意識との関連から—」(2011)『東北大学大学院教育学研究科研究年報』59-2, 95-112
- 鯨岡峻(2006)『ひとがひとをわかるということ～問主観性と相互主体性～』ミネルヴァ書房 26-126
- 杉本希映, 庄司一子「『居場所』の心理的機能の構造とその発達的变化」(2006)『教育心理学研究』54, 289-299
- 倉本英彦(2012)『児童心理～安心感の乏しい子～』金子書房 17-22
- 丹羽さかの, 安藤智子, 岩藤裕美, 立石陽子, 荒牧美佐子, 砂上史子, 堀越紀香, 無藤隆(2005)「幼稚園における子育て支援の実態調査(2)(2005年調査)」『お茶の水女子大学子ども発達教育研究セン

ター紀要』3, 17-29

全国保育団体連絡会, 保育研究所 (2014) 『保育白書 2014』 ちいさいなかま社 118

津守真 (1979) 『子ども学のはじまり』 フレーベル館 23-67

津守真 (1980) 『保育の体験と思索～子どもの世界の探求～』 大日本図書 146-148

則定百合子 (2007) 「青年版心理的居場所感尺度の作成」 『日本教育心理学会総会発表論文集』 337

